

性器クラミジア感染症

性器クラミジア感染症は、日本で最も多い性感染症(STD: Sexually Transmitted Disease)であり、感染症法(平成15年11月5日施行:本誌No.108 参照)では5類感染症として性感染症定点病院からの報告が義務付けられています。

昨年、旭川医科大学が実施した大規模調査により高校生の10人に1人がクラミジアに感染しているとのショッキングな報告がされました。この疾患は、感染しても多くが無症状や症状が軽いため感染に気づかないことが多く、近年、若年層の感染者の増加が問題となっています。

《病原体》

クラミジアは細菌に属しますが、一般細菌と異なり無細胞培地では増殖できず、動物細胞内でのみ増殖する偏性細胞寄生性の小球菌です。現在、クラミジア属には4種が存在し、性器クラミジアの病原体は以前、目の結膜炎の一つであるトラコーマの病原体として知られていた *Chlamydia trachomatis* で、その他、オウム病クラミジア(*C. psittaci*)および肺炎クラミジア(*C. pneumoniae*)の3種が人に感染します。

性器クラミジア感染症は、あらゆる性行為が感染源となります。

《症状》

約1~3週間の潜伏期間を経て、男性では排尿痛、尿道不快感、掻痒感などの症状が現れます。女性では子宮頸部や尿道に感染し、おりものの増加や排尿痛、下腹部痛などの症状が現れます。また、咽頭部に感染すると、のどの痛みや発熱などの症状がでます。女性生殖器炎は、男性に比べ症状が軽いため感染を見逃してしまうことが多く、未治療のまま放置してしまいがちになります。しかし、未治療のまま放置しておくとうつ子宮や卵管へと感染が広がり、骨盤炎、不妊および子宮外妊娠などの原因にもなります。また、妊婦が未治療のまま出産すると生まれてくる赤ちゃんにもクラミジアによる結膜炎や肺炎を起こすことがあります。

《流行状況》

2000年~2003年の感染症発生動向調査における年齢別・男女別の定点病院あたりの報告数をみると患者は若年層に多く、29歳以下では男性より女性の患者数が多くなっています(図)。これは、性交渉開始時期の低年齢化、女性の場合は約75%、男性の場合は約50%が無症状であること、さらに女性の場合は自覚症状が出にくい

などが原因としてあげられます。

《検査法》

尿や膣分泌液等からクラミジアの遺伝子を検出する方法や、抗原や抗体を測定して感染を調べます。病院に行って調べてもらうのは気が引けるという場合は、自宅で検査ができる検査キットが市販されています。

検査を受ける場合、性交渉のパートナーも感染している可能性が高いため、その相手も治療を行わないと再感染してしまうことからパートナーも必ず一緒に検査・治療を受けましょう。

《クラミジアとHIV》

「クラミジアの陰にHIVあり」と言われているように、クラミジアに感染していると感染していない人に比べてHIV感染者との性交渉でHIVに感染する確率が約5倍高くなるといわれています。このため、若年層へのHIV感染拡大が懸念されています。

《予防と治療》

予防には、感染しているかどうかわからない相手とは性交渉を避けること、コンドームをきちんと使用することがあげられます。

治療は、クラミジアに効果のあるマクロライド系、ニューキノロン系、テトラサイクリン系の抗生物質を服用します。

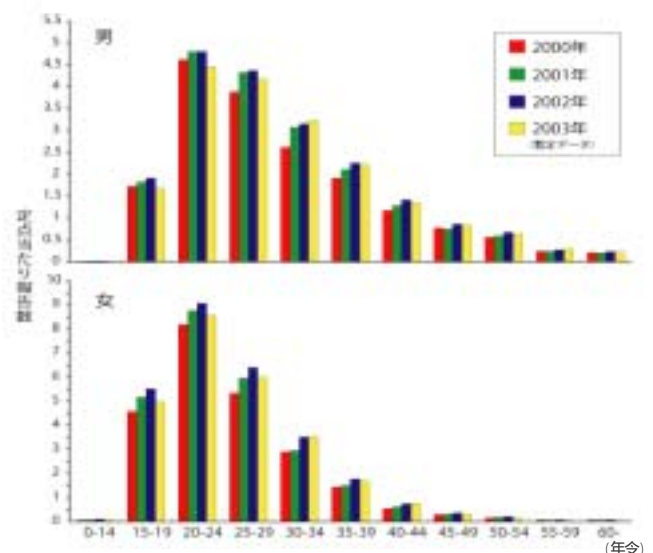


図. 年齢群別性器クラミジア感染症患者発生状況

(国立感染症研究所発行 感染症週報2004年第8週号より引用)

参考: CDC ホームページ (<http://www.cdc.gov>)

感染症発生動向調査週報(2004年第8週号)

【微生物担当】